

【研究者】 宮西 香穂里  
(助成決定時) 京都大学大学院 人間・環境学研究科

【研究題目】

ジェンダーの視点から見るプエルトリコにおける米軍基地と地域社会の文化人類学的研究

交際・結婚、売買春、反基地運動を中心に

【研究の目的】

本研究の目的は、米軍男性と現地人女性との関係に注目するジェンダーの視点から、プエルトリコの米軍基地と地域社会との関係について考察することである。その際、1) 交際・結婚、2) 反基地運動の2領域に焦点を当てる。具体的には、1) 米軍男性と交際・結婚したプエルトリコ人女性やその家族の生活、2) 「基地の島」として知られ、米海軍の基地撤退をめぐる争ってきたビエケス島を中心とする、反基地運動に注目する。また、ビエケス島とプエルトリコ本島における基地撤退後の人々の生活や反基地運動家と元基地内従業員・基地の町で働く人々との意識差についてもとりたい。現地人女性は、妻として、基地内従業員として、あるいは売春婦として基地(米兵)に関わることで生活の安定を得ようとする。そして、それに反発する運動家たちがいる。だが、この女性たちの事情は異なるし、そこで作用する力関係も一律ではないという視点から調査を行う。

【研究の内容・方法】

現地における本研究は、二度にわたって行った。一度目の調査では、プエルトリコのビエケス島で、主に反基地運動について調査を行った。ビエケス島は、プエルトリコ本島の東側に位置し、1941年から米海軍の実弾演習場として利用されてきた。軍事訓練基地が島の大部分を占め、誤爆事件なども頻繁に起こり、島民との争いが耐えなかった島である。2003年5月にビエケス島から基地が撤退となった。反基地運動にはさまざまな団体や組織が関わっている。今回は、基地撤退において中心的役割を果たした、ビエケスの救援と発展のための委員会(Committee for the Rescue and Development of Vieques :CRDV)について調査を主に行った。また、CRDVとも関わりが深く、女性から構成される、ビエケス女性連合(Vieques Women's Alliance)という団体も反基地運動に大きく関わっていた。彼女たちが行うワークショップに参加し、会長のプエルトリコ人女性や会員女性たちとインタビューを行った。

1950年代か60年代に米軍男性とビエケス島で知り合い結婚したビエケス出身の女性とその夫にも話を聞いた。

二度目の調査は、プエルトリコ本島で行った。2004年3月に撤退が決まったルー

ズベルト・ローズ米海軍基地は、本島の東部、セイバ（Ceiba）という町に位置していた。この基地があったころは、米軍男性とプエルトリコ人女性との交際や結婚が数多く見られた。以前、米軍男性と結婚・交際していたプエルトリコ人女性とインタビューを行った。さらに、セイバの基地周辺の米軍を相手とする飲食店やストリップ・バーなどの営業者や従業員などに、基地撤退前と後の生活変化やこれまでの営業について聞いた。また、元基地内従業員であった女性からは、失業するまでのいきさつ、失業後の生活や基地撤退についての見解を聞いた。

#### 【結論・考察】

米海軍を撤退したビエケス島の島民全員が、基地撤退に賛成であったわけではない。ビエケス島には反基地運動家と、米軍男性と結婚したビエケス島出身の女性など、まったく異なる見解をもつ人々が住んでいる。プエルトリコ人女性たちが、家庭の外にでて活動することに対する男性たちからの嫌がらせがあった。基地の町で生まれ軍人家族から英語を覚え、軍人男性と交際したプエルトリコ人女性は基地が撤退することを悲しく思っている。基地内従業員であった女性は、職を失い職安に通う日々をおっている。以上のように、プエルトリコの米軍基地をめぐる地域住民との関係や問題は非常に複雑かつ多様である。そこには、プエルトリコがかかえるアメリカ合衆国との「植民地」的關係が影響していると考えられる。また、基地撤退後の基地の町や、本研究では十分に調査できなかった売買春についても今後の課題としてあげておきたい。